

説教「試練」

(申命記 30 章 15-20 節、マタイによる福音書 4 章 1-11 節)

2021 年 2 月 21 日 主日礼拝
日本基督教団 仙川教会
大串肇牧師

イエスは洗礼を受けた直後にサタンの挑戦を受けました。その試練を通して聖書はイエスがまことの神の子であることをわたしたちに語ろうとしています。その中で興味深いことにサタンをしてイエスに「(もし) **あなたが神の子ならば**」と語らしめています。明らかに、イエスが神の子であることをサタンは否定していません。それどころか、むしろ十分に知っているのです。但し、イエスが神の子であるのならば、何故この世界を大いなる力をもって支配しないのか、神がいると言うならば、この世界の問題をどう解決するのか等、「疑い」を投げかけているのです。このような疑い、神への懐疑こそ、サタンの最大の挑戦なのです。

確かに、果たして神がいるとする、イエスが救世主であるとするならば、なぜ戦争が起き混乱があり、人は大勢苦しんでいるのか、なぜ日本にはせいぜい 1 パーセントしかクリスチャンがいないのか。あなたが神を信じるとしても神はあなたにほんとうに興味や関心があるのか?おそらくサタンの問いかけは、ある意味理にかなっているように見える、次々と湧き出て、リアルな重みを持っていたはずであり、持っているはずですが、しかしこのような懐疑こそ、わたしたちの信仰を揺さぶり、わたしたちの教会や交わりであるとか、信仰の絆を徹底的に破壊し、わたしたちを孤立化させる力があるのです。

おそらく、ローマ帝国支配下にあつてユダヤ人からも激しい迫害にさらされていたキリスト教徒にとりまして、自分たちの信仰に対する揺さぶり、疑いや不安は深刻でした。試練の最中にありまして、マタイ福音書の教会は神の子イエスの生き様に目を向けたのでしょう。神の子であるイエスが試練をどう克服したのかはわたしたちにとりまして重要な意味があると言えるのではないのでしょうか。そこで注目していただきたいことは、3回のサタンの挑戦にあつてイエスはいずれの場合も聖書のみ言葉を持ってサタンを撃退している点です。

「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」

→「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」

(申命記 8 章 3 節参照)

「神の子なら、飛び降りたらどうだ。」

→「あなたの神である主を試してはならない。」(申命記 6 章 1 6 節参照)

「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」

→「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ。」(申命記 6 章 1 3 節)

つまり、信仰とは何か。神の御言葉、聖書の言葉を信じて生きるかどうかなのです。第一の聖書の御言葉は「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」という御言葉です。人間の飢えや渇きの問題は深刻です。どうでもいいことではなく、イエスは人々を憐れんでパンの奇跡を起こされました。しかし奇跡を起こして神の子であることを誇示することはなさいませんでした。当時のユダヤ人たちが待ち望んでいた英雄やヒーローの姿とは全く違いました。イエスは神の子でありながらわたしたちと同じように人となり、弱さを担い、わたしたちのような罪人が受けるべき洗礼を自ら進んで受け、ほんとうに貧しく卑しい姿で十字架に付けられました。そのご生涯こそ、神がわたしたちを赦し、愛して下さっている証です。奇跡が信仰を生んだのでは

なく、神の愛が奇跡を起こしたのです。

サタンとの戦いは実はこの場面で終わりませんでした。ここでは「立ち去った」だけです。実に主イエスが弟子たちに御自身の十字架を告げられた時、ペトロは十字架の道を歩まれることを制止しようとしていました。そのときもペトロに向かって「**サタンよ、退け**」と語られました（マタイによる福音書 16:21-23）。そしてイエスの最後の誘惑は、あの主イエス・キリストが十字架にお付きになられた時でした。

折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけられていた。そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、言った。「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」同じように、祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから。」一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。（マタイによる福音書 27:38-44）

イエスは権力や権威を示してこの世を支配する道を放棄されました。しかしながら神の御心に適う従順な僕として苦難をお受けになり、十字架で死を遂げられました。この十字架とその死によって神の愛を完成し、サタンに完全に勝利されたのです。十字架の前にあって未だベールに覆われたサタンに対する勝利の事実を、マタイ福音書 4章はただ暗示して結んでいるだけです。「**退け、サタン……。そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。**」

イエスの勝利宣言はこの福音書の最後で宣告されます。またもや「**山の上**」でイエスが天地を支配する真の王であるお方であることが明らかに、高々と語られるのです。

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った……言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」（マタイによる福音書 28章 16-20節）

皆さん、わたしたちが様々な困難や無力さを体験した時、思い起こしていただきたいのです。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」。主イエス・キリストは地位や権力を誇示している側、差別や暴力によってこの世を支配する側ではなく、試練の最中であって困難や弱さを担って苦しんでいる人々の側に立っているからです。他方、順風満帆のように見える人生行路の中で、わたしたちはむしろ御言葉から離れないでサタンの挑戦に打ち勝つことを真剣に祈らねばならないのではないのでしょうか。それはちょうどマタイ福音書にある主の祈りにあるようにです。

「わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。』

そのとき、必ずイエスはわたしたちの側に立ってあらゆる試練に打ち勝つ信仰を与えて下さるのです。このことをわたしたちは信じてご一緒にお祈り致しましょう。